

プラズマ物理学 I 講義メモ (第 5 回)

(担当: P 研 渡邊智彦; 2014.5.30 作成)

4.3 衝突項への要請

1 体分布関数 $f_s(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t)$ を扱う運動論的方程式において, 2 体衝突の効果は分布関数への演算子として表される. すなわち, 粒子種 s と s' の衝突による s 種の分布関数への影響は, Vlasov 方程式の右辺に衝突項 $C_{s,s'}(f_s, f_{s'})$ を付け加えることで導入されることになる

$$\frac{\partial f_s}{\partial t} + \mathbf{v} \cdot \nabla f_s + \frac{q_s}{m_s} (\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B}) \cdot \frac{\partial f_s}{\partial \mathbf{v}} = \sum_{s'} C_{s,s'}(f_s, f_{s'}) . \quad (1)$$

ここで, 電子-電子衝突では, $C_{e,e}(f_e, f_e)$, 電子-イオン衝突の場合は, $C_{e,i}(f_e, f_i)$, イオン-電子衝突では, $C_{i,e}(f_i, f_e)$ という具合になる. 衝突の種類や分布関数に応じて $C_{s,s'}(f_s, f_{s'})$ の具体的な表記には様々なモデルが用いられるが, ここではそれには立ち入らない. そのかわり, 流体方程式の導出においては, 衝突項に以下の要請を課すことにしよう. ただし, 電離や再結合, 核融合反応のように, 粒子種の変化が起きないとする.

粒子保存則:

$$\int_{-\infty}^{+\infty} C_{s,s'}(f_s, f_{s'}) d^3v = 0 \quad (2)$$

運動量保存 (同種粒子衝突):

$$\int_{-\infty}^{+\infty} m_s \mathbf{v} C_{s,s}(f_s, f_s) d^3v = 0 \quad (3)$$

運動量保存 (異種粒子衝突):

$$\int_{-\infty}^{+\infty} m_s \mathbf{v} C_{s,s'}(f_s, f_{s'}) d^3v + \int_{-\infty}^{+\infty} m_{s'} \mathbf{v} C_{s',s}(f_{s'}, f_s) d^3v = 0 \quad (4)$$

エネルギー保存 (同種粒子衝突):

$$\frac{1}{2} \int_{-\infty}^{+\infty} m_s v^2 C_{s,s}(f_s, f_s) d^3v = 0 \quad (5)$$

エネルギー保存 (異種粒子衝突):

$$\frac{1}{2} \int_{-\infty}^{+\infty} m_s v^2 C_{s,s'}(f_s, f_{s'}) d^3v + \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{+\infty} m_{s'} v^2 C_{s',s}(f_{s'}, f_s) d^3v = 0 \quad (6)$$

4.4 流体方程式の導出

これでようやく流体方程式を導出する準備が整った。まず、式 (1) の 0 次モーメントを考えよう。すると、式 (1) の第 1 項は密度の時間微分項、第 2 項は粒子フラックスの発散項、となることは直ちに分かる。第 3 項は \mathbf{v} で積分し、 $f_s(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t)$ は $|\mathbf{v}| \rightarrow \infty$ で急速に 0 になることを要請できるので消える。第 4 項は衝突項の粒子数保存から消えて、結局、流体力学でなじみ深い連続の式を得る。

$$\frac{\partial n_s}{\partial t} + \nabla \cdot (n_s \mathbf{u}_s) = 0. \quad (7)$$

次に、式 (1) に $m_s \mathbf{v}$ を乗じて 1 次モーメントを計算する。第 1 項は単位体積当たりの運動量の時間変化を与える。第 2 項は、前回述べたように、diadic $\mathbf{v}\mathbf{v}$ の発散なので、平均流 (\mathbf{u}_s) 部分とそこからの差 (\mathbf{v}') に分けてそれぞれ積分する。平均流部分は、運動量フラックスの発散を与え、一方、 $\mathbf{v}'\mathbf{v}'$ の部分からは圧力テンソルを得る。以下では \mathbf{v}' に関して等方的な速度分布を仮定することしよう。すなわち、

$$\nabla \cdot \mathbf{P} \rightarrow \nabla p \quad (8)$$

とする。第 3 項の計算では、まず \mathbf{v} で部分積分し、例によって表面積分項は消える。一方、そこで現れた $\partial \mathbf{v} / \partial \mathbf{v}$ については、

$$\frac{\partial \mathbf{v}}{\partial \mathbf{v}} = \frac{\partial v_i}{\partial v_j} = \delta_{ij} \quad (9)$$

を使って変形する (ここで δ_{ij} は Kronecker の delta を意味する)。最後に衝突項による運動量変化を drag として

$$\sum_{s' \neq s} \int_{-\infty}^{+\infty} m_s \mathbf{v} C_{s,s'}(f_s, f_{s'}) d^3v \equiv - \sum_{s' \neq s} \mathbf{R}_{s,s'} \equiv -\mathbf{R}_s \quad (10)$$

として表すと (ただし、運動量保存から $\mathbf{R}_{s,s} = 0$)、 s 種の粒子についての流体の運動方程式

$$m_s \left[\frac{\partial}{\partial t} (n_s \mathbf{u}_s) + \nabla \cdot (n_s \mathbf{u}_s \mathbf{u}_s) \right] = -\nabla p + q_s n_s (\mathbf{E} + \mathbf{u}_s \times \mathbf{B}) - \mathbf{R}_s \quad (11)$$

を得る。左辺第 1 項は単位体積当たりの運動量の時間発展を示し、第 2 項は運動量フラックスの発散を表している。連続の式を使って左辺を変形すると、流体の運動方程式としてよりなじみのある形を得る

$$m_s n_s \left(\frac{\partial \mathbf{u}_s}{\partial t} + \mathbf{u}_s \cdot \nabla \mathbf{u}_s \right) = -\nabla p + q_s n_s (\mathbf{E} + \mathbf{u}_s \times \mathbf{B}) - \mathbf{R}_s. \quad (12)$$